
小さな棺桶

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな棺桶

【Nコード】

N9830E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ポーランド。そのの渡し守ワレサはふと茂みから小さな声を聞いた。やがて奇妙な男が彼の前に姿を現わして。聊齋志異からヒントを得た作品です。

第一章

小さな棺桶

ポーランドはかつてロシアだのプロイセンだのオーストリアだのにその土地を奪われてきて分割された歴史がある。ナポレオンに利用されたこともあればヒトラーに攻められたこともある。だが近年は民主化を果たしどうにかこうにか頑張りやっとなんか適ってきている。その昔はリトアニアと連合王国を形成していた。その時の話だ。

首都ワルシャワにも流れるヴィスラ川。ポーランドの大動脈ともいえる川だ。ここの船頭でワレサという男がいた。彼はいつも仕事の帰りにビールをたらふく飲んでいた。今日もそれでたらふく飲みいい気持ちでいた。それで家に帰ろうと夜道を歩いていると何やら話す声が聞こえてきた。

「はて」

ワレサは何かと思い耳をすました。それで聞いていると実に小さな声が左の茂みの中から聞こえるのだ。月もなく真っ暗な夜だった。が声だけは聞こえてくる。

「明日だな」

「うむ、明日だ」

何人かいるらしい。口々に話している。

「明日箱を運んで行くと舟を使う男がいる」

「舟をだな」

「そうだ」

それを念押ししているようだった。

「明日だ、いいな」

「わかった」

そんな話をしていた。この時は何の気にも留めなかった。それで家に帰るとまずは女房から迎えの言葉を貰った。

「おかえり、あんた」

「ああ、おかえり」

「また随分飲んだんだね」

ワレサの顔をランプで照らしながら声をかけてきた。

「晩御飯はどうするんだい？」

「いつも通りだよ」

こう女房に答えた。

「軽くくれ」

「じゃあパンとソーセージってところだね」

「ああ」

女房の言葉に頷く。頷きながら椅子に座り置かれたソーセージと黒いパンを口にする。その二つを食べながら女房に対して問うのだ。

「なあ」

「何だい？」

「最近何かおかしいことがあったのか？」

「おかしいことって？」

「とりあえず聞いたことはないか」

こう問うのだ。

「戦が起こりそうだとかそんなのではないか？」

「別にそんなのは聞かないね」

首を捻りながら亭主に答える。ランプの中にもう老けてしまった可愛い顔が見える。ワレサもワレサで若い頃と比べれば随分太ってしまった。最近では足の親指の付け根がやけに痛む。二人共いい歳なのだ。

「教会の神父様もお元気だし領主様もね」

「そうか」

「とりあえずこの辺りは平和だよ」

また亭主に言うのだった。

「今まで通りね。いいことじゃないか」

「それは何よりだ。商売も繁盛しているしな」

「その分を飲むってのはどういうものかね」

ここで少し嫌味を言ってきた。

「酒もいいけれど程々にしなよ。毒だよ」

「その毒を飲むのがいいんだよ」

しかし彼は反省しない。見れば家でもビールを飲んでいる。泡立つビールを木の大きなコップに入れてごくごくとやっていた。顔はさらに赤くなる。

「違うか？」

「やれやれだね、全く」

「子供達も大きくなった。だったらもう気兼ねなく飲めるじゃないか」

「小さい頃から飲んでたじゃないか」

女房はこう突っ込みを入れる。

「嘘を言ったら神様に怒られるよ」

「何だよ、今日は随分厳しいな」

「遅いからだよ」

厳しい理由はそれだった。亭主の遅い帰宅に角を立てているのである。

「全く。食べ終わったら早く寝なよ」

「わかってるさ。じゃあな」

「あたしは先に寝るからね」

女房は先に藁で作ったベッドの中に入ってしまった。藁の上に白いシーツをかけただけのものだ。この時代の庶民のベッドだ。ワレサも遅い夕食を食べ終わるとその中に入った。それで暫くしてうとうととした頃だった。今度は枕元で囁く声が聞こえてきたのだ。

「いいか、明日のことだが」

「うむ、さっきの続きだな」

「そうだ。その舟を操る船頭に金貨を千枚くれと言え」

「千枚だな」

「そうだ、千枚だ」

そこが強調されていた。

「千枚と言うのだ、いいな」

「わかった、千枚だな」

「また随分と大金だな」

ワレサはその話を聞いて心の中で思った。しかし今はそれを聞いているだけだった。何も言わずに寝ながら聞いているだけだった。

「若しそいつが出し惜しみをすれば」

「どうするのだ？」

「これを見せてやれ」

そう言って三つの紋章を家の壁に描いた。ワレサもそれを見た。見ればそれはどれも何処かの家の家紋である。

「この三つを見せてやればいいからな」

「ふむ、その三つをだな」

「それだけでいい。わかったな」

「承知した。それではな」

「うむ」

これで話は終わった。ワレサは話が終わったのを確認した。とりあえずは夢か何かだと思うことにした。酒をかなり飲んでいることも自覚していた。それでもう完全に寝ることにして目を閉じた。翌朝起きると朝飯の固いパンをミルクで溶かしたものを飲んでから仕事に向かった。舟を行き来する間昨夜のことを考え客人にも気をつけていた。やはり昨夜のことが気になっていたからだ。

「さて、どうなるかな」

こう考えるのだった。

「来るかどうか。あの話が」

そのことを考えていると日が西になる。その時に岸边に大きな葛籠を背負った小柄な男がいた。ワレサはその男を見て心の中でもしや、と思った。それで好奇心に誘われて彼に近付くのがあった。

「向こう岸までですね」

「その通りです」

見れば陰気な顔をしている。顔の色は土気色だ。どうにも薄気味悪い印象を受ける。だがそれでも話の通りになるのかどうか興味を持っていたのと仕事なので彼を舟に乗せた。そうしてまずは向こう岸までやったのだった。

そして向こう岸に着いた。すぐに渡し賃を要求しようとした。だがそれより前に。

「金貨を頂きたい」

「金貨を」

「左様」

夜の話の通りだった。こう彼に言ってきたのだ。

「金貨をです。宜しいでしょうか」

「私が受け取るのではなくて？」

「貴方が払うのです」

理不尽にこう言うのだった。

「宜しいですか」

「まさか。御冗談でしょう」

彼はそれを相手にしなかった。だが心の中ではやはり、とも思っていた。しかしそれをあえて隠して話を続けるのだった。これも好奇心故である。

第二章

「何故私が払うのですか」

「金貨千枚です」

そのうえ額まで言ってきた。

「さあどうぞ」

「千枚とはまた」

途方もない額だと思った。それと共にこれもまた夜の話の通りだと思った。二つの気持ちが心の中で入り混じっていたのである。

「そんなお金持っていますか」

「持っていないと」

「左様です」

あらためて言うのだ。

「とてもですが」

「では。払えないのですね」

男はワレサに念押しして尋ねてきた。

「金貨千枚。どうしても」

「ですから。とてもそれだけは」

ワレサはやはりこう答えた。答えながら彼が次に何をしてくるか。心の中で目を見張っていた。

「ありません」

「わかりました。それでは」

男はそこまで聞くとまずは頷いた。そして懷からあるものを出して来た。それは。

やはりあの三つの紋章だった。剣のものと槍のものと兜のもの。それぞれ三つあった。その三つの紋章が描かれた布をワレサの前に出したのだった。

「どうぞ」

「どうぞとは」

「これを差し上げます。さあ、どうぞ」

「!?!? こんなものを一体どうして」

「とにかく差し上げます。早速陛下にお見せして下さい」

そのうえ今度は王の名前まで出す。彼にはもう訳がわからなかった。

「何故王様にこれを?」

「出せばわかります。それでは」

彼はここまで言うと言を消した。後にはあの葛籠が舟の上に残されているだけだった。その葛籠が気になって空けてみると。中にあるのは小さな、指位の棺桶が三つあるだけだった。

「またおかしいことだな」

こんな小さな棺桶が何の役に立つのかと思った。しかも人の半分程の大きさの棺桶にその三つだけだ。おかしいと言えばあまりにもおかしい。しかも棺桶の中には血の雫が入っているだけだった。

「ますますわからんな」

ワレサは首を捻るだけだった。何が何だか全くわからない。だが男が言った言葉は覚えているのだった。

「王様のところか」

とりあえずそれは思い出した。それですぐに川辺の護りを担当している役人に貰ったその三つの紋章を見せて話そうとした。ところが役人はその紋章を見ただけでもう顔色を変えてしまった。

「そうか、遂にか」

「!?!? どうしたんですか」

「どうしたんですかではないぞ、ワレサさんよ」

役人と彼は古い付き合いだ。だからさん付けなのだ。

「これはすぐに陛下にお知らせしないと」

「わしにこれを渡してくれた男もそう言っていましたよ」

「まことか」

「まことも何もこんなことで嘘ついてどうなるんですか」

彼は素直にこう答えた。訳がわからないのでそれが顔にまで出て

口髭を下ろさせていた。

「違いますか？」

「それもそうだな。しかもあんたが知ってる筈がない」

「知ってる筈がないって」

彼はさらに話がわからなくなった。顔全体がいぶかしむものになつてゐる。

「何が何だか」

「いや、こっちの話」

役人はこれ以上ワレサには話さなかった。

「とりあえずあんたには後で褒美があるだろう。ではな」

「褒美ですか」

「それだけじゃ。後は何の関係もないからな」

「ですか」

ワレサにとっては何が何だかわからないまま話は終わった。それから暫くして彼がいる川を兵隊やら馬が船で通った。ワレサが漕ぐ舟よりも遥かに大きい船が幾つもあった。

「戦かな」

そう思った。だがその時はそれだけだった。とりあえず自分のいるところで起きるのではなさそうだからそれでよかった。だが暫くしてから彼は役人の口からとんでもないことを聞いたのだった。

「反乱が起ころうところだったのが」

「反乱といいますと」

「実はな、三つの領主の家が謀反を企てていたのだ」

役人は川辺でワレサに対して話をしていた。前に言っていた褒美を渡すついでのことだ。川のほとりに二人並んで座り弁当を食べながら話をしてゐる。

「謀反をですか」

「もう少しで兵が集まるところだった。それより先に叩くことができた」

「危ないところだったんですね」

「うむ。前から怪しいと思われていたがな。密偵も入っていた」
これもまたワレサの知らない話だった。

「密偵もですか」

「そうじゃ。まあわしも連絡役をしておった」

今だから話すことであつた。

「実はな」

「そうだったのですか」

「そうじゃ。それで彼等が謀反を企てているとはっきりわかったその時を知らせるその合図が」

「あの三つの紋章ですか」

「その三つの家の紋章だったのじゃ」

だからなのだった。彼がああ三つの紋章を見て驚いたのは。

第三章

「それで軍隊を動かしたというわけじゃ」

「そうだったのですか」

「しかしじゃ」

ここで役人は言う。

「一つわからないことがある」

「何ですか、それは」

「何故ワレサさんがそれを持っていたのじゃ？」

彼が言うのはそれだった。どうしてワレサがその三つの紋章を持っていたのかわからなかったのだ。それでそのことを彼に問うたのだ。

「それがわからぬ。それはまたどうしてじゃ」

「お話してもいいものか」

だがここでワレサは腕を組んで難しい顔をするのだった。

「果たして。信じて頂けるかどうか」

「信じるぞ」

役人はまずそれを保障してみせた。

「またそれで捕まるということはない。それも保障する」

「左様ですか」

「だから言ってみてくれ」

それをどうしても聞きたかったのだ。

「何があったのか。さあ」

「はい、それでは」

重ね重ね保障されそれを頼りとして話すことにした。彼はあの夜の話を話すのだった。

話の間役人はじっと話を聞いていた。聞き終えてから瞑目して言うのだった。

「左様だったか」

「はい、そうです」

「面妖な話じゃ」

話を聞き終えてまずこう言うのだった。

「小人共が出て来るだけではなく金を出せというとはな」

「ここで金を渡すことができればどうなったでしょうか」

「さてな」

役人はそれには首を横に振るのだった。

「それはわしにもわからん」

「左様ですか」

「渡せばひよつとして」

「ひよつとして？」

「三人の謀反は成功したかも知れん」

こう言うのだ。

「何せあれじゃ。ワレサさんが紋章を貰ったことで謀反がわかったのじゃ」

「ええ」

これは確かだった。若しそれがなければ謀反は見つかっていなかった。それは確かだ。そういうところまで考えれば金を払えば謀反は成功していたかも知れない。あくまで知れないだが。

「それを考えれば。運命の分かれ道だったな」

「この国ですか」

「全く以ってわからんものじゃ」

役人はあらためて呟いた。

「そんなことから国が救われるのだからな」

「全くです」

「何はともあれ謀反が防がれ戦乱もあの三人が自決して事なきを得た」

「何もなしですか」

「結果としてはそうなった」

それをまた語る。

「それはよいことじゃな」

「そうですね、確かに」

ワレサもそれに頷く。

「では。あれは平和と戦争の分かれ目だったのですね」

「そうなるな。ではワレサさんよ」

「はい」

「その陛下からの褒美じゃが」

「王様からのですか」

その話になる。ワレサの顔が少し晴れやかになった。

「何がよいかの。陛下は何なら貴族にしてもいいと仰っているそうだが」

「貴族に!？」

「左様。何しろ戦乱を未然に防ぐことができた」

このことを彼に言う。

「その功績が大きいとしてな。どうじゃ」

「いや、そんなのはいいですわ」

だがワレサは笑って。その申し出を断るのだった。

「貴族なぞ。私には」

「よいのか」

「御大層です」

今度はこう言って断る。

「貴族なぞとは。ですから」

「よいのじゃな」

「はい」

また頷いてみせる。

「そんなものは」

「そうか。じゃあ何がいいのだ?」

「そう言われましても別に」

これと言って思い浮かばないのだった。彼は今の暮らしで満足していた。だからだ。

「ありませぬ」

「だがそれだと陛下のな。面子が立たぬ」

彼が受け取らないわけにもいかなかったのだ。王にも王としての体面がある。だからそれもあってどうしても受け取ってもらわないといけないのだ。ここが難しいところだった。

「何でもいいから言ってみてくれ。ここはな」

「わかりました。それでは」

「うん。何かな」

「好きなだけビールが飲めたらいいですね」

「ビールがか」

役人はビールと聞いてその目を少し丸くさせた。

「ビール。それだけでいいのか」

「それだけで満足です」

また笑って話すのだった。

「仕事の後でそれを飲むことができれば」

「そうか。それでいいのか」

「もうそれで充分です」

また答える。やはりその言葉に迷いはない。はつきりとしたものだった。

「それだけで」

「何だ、無欲だな」

役人はワレサの言葉を聞いて言うのだった。意外といった感じだったがそれでもすぐに思いなおした。それでまた言うのである。

第四章

「いや、それもワレサさんらしいか」

「そうですか」

「それに素直だな」

彼を知っているからそれも言った。

「素直だから戦乱にならなかったのかもな」

「といいますと」

「いや、その金貨千枚を払えと言われた時だ」

「はい」

話はその時に戻る。

「正直払うとはったりを言うだけでもよかっただろう」

「そういえば相手は武器も何も持っていないませんでした」

言われてその時のことを思い出す。

「魔術はどうかわかりませんが」

「まあそこで魔術は使わなかっただろうな」

「そうですか」

「運命の分かれ道だ」

役人はそこをまた指摘してみせた。

「あんたがどういった態度を取るのかな。それで決まったんだよ」

「謀反が成功するか失敗するか」

「けれどあんたはないと言った」

それもまた言ってみせる。見れば役人の顔は普段より賢そうなものになっていた。普段の何処か茫洋とした感じはあまりなくなっていた。

「それで決まったんだよ」

「そうでしたか」

「そういうことさ。何はともあれ謀反は防がれた」

役人はそのことに満足していた。納得した顔で頷いているのがそ

れの何よりの証拠だった。

「よかったよ、本当にな」

「そうですね。しかしまだわからないことがあります」

「何だい？」

首を傾げるワレサに対して問う。

「いえ、何で私みたいなのにそんな国や多くの人の運命が関わるような話が来たんでしょう」

「それか」

「しがない船頭ですよ」

己の職業を話に出す。

「そんなのにどうして」

「偶然だろうな」

役人は少し上を見上げた。そこにある青い空を見つつ答えた。

「偶然ですか」

「はっきりとは言えないがそうなんだろうな」

彼は賢そうな感じが少し消えていた。その代わりにその分だけ懷疑が入っていた。地の茫洋とそこに賢明と懷疑が混ざった、実に複雑な顔になっていた。

「結局のところな」

「偶然なんですか」

「一番わからないものさ」

こうも言ってみせる。

「神様のされることでね」

「神様がですか」

「偶然だけはどうしようもない」

彼の言葉は続く。

「全く以ってな。ダイスと同じだよ」

「転がすまでわからないってことですか」

「あんた博打はしないんだったな」

「ええ」

彼がすることといえば酒だけだ。他にはない。そういう意味では真面目なのだ。もっともその酒の飲み方がかなりの量であるのだが。

「あんなの何がいいのか」

「じゃあわかりにくいな。まあとにかく」

それでも説明する。

「転がしてみて。それからわかるものなんだよ」

「偶然は、ですか」

「今回はいい方向に出た」

それをまず述べる。

「けれど一歩間違えていたら」

「どうなるかわからなかったですね」

「そういうことだな。いい方向に転がって何よりだ」

運がよかった、そう言っていた。それと共にその幸運に感謝もしていた。

「本当にな」

「そうですね。偶然がいい方向に転がって」

「何よりだよ、皆にとってな。当然ワレサさんにもな」

「私にもですか」

「だってそうじゃないか。褒美を貰えるんだ」

話が褒美のそれに戻った。

「いいことじゃないか」

「まあそうですね」

「飲むんだろ、今日も」

「はい」

これはもう決まってることだった。彼にとっては当然の答えだった。

「そのつもりです」

「だったら飲めばいいさ、これから好きなだけ飲めるんだ」

「そうですね。それじゃあ」

「遠慮することはないさ。ワレサさんが運がよかったんだ」

今度は運に話が戻る。話が行ったり来たりだ。

「本当にな。じゃあ今日は」

「今日は？」

「俺も一緒にいいか」

親しげな笑みを浮かべて彼に言ってきた。

「酒を。二人でな」

「いいですね、それ」

そしてワレサもそれに乗る。

「じゃあ二人で」

「俺の分は俺が払うからな。それでな」

「褒美ですから別にいいのに」

「俺も。無欲な性分だな」

また笑っての言葉だった。

「こういうことで誰かに頼りにはなりたくないんだよ。だからな」

「そうですか」

「ああ。じゃあ帰りにな」

「ええ、帰りに」

「二人でビールを飲みに行こう」

二人で約束して分かれた。ポーランドの古い話だ。一人の素朴で無欲な酒好きの男が何となしに素直に答えたことで多くの人の命と国が助かった。世の中時としてこんな偶然があるということだ。それは何時何処で起こるかわからない。このポーランドだけとは限らない。全ては偶然のままである。

小さな棺桶

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9830e/>

小さな棺桶

2010年10月8日15時04分発行